

5. 平成7年12月24日の緊急野外観察会報告

年の瀬も迫り、町中には「ジングルベル」や「きよしこの夜」の曲が流れ、何かと慌ただしい平成7年12月24日、本研究会の緊急野外観察会が開催されました。これは南国市領石の高速道路工事現場から“白亜系の化石が産出する”との報に接し、急遽、会員に観察会開催を呼びかけたものです。連絡から観察会当日まであまり日数がなく、年末でしかもクリスマス・イブとあって、参加者が少ないのではと懸念されましたが、ふたを開けてみるとなんと参加者40名を越える盛況となりました。高知大学理学部の近藤先生から、この付近の地質や化石についてのお話をうかがった後、各自ここはと思う所に陣取り、化石の採集にとりかかりました。しばらくすると「ワー」とか「ヤッター」という化石発見の喜びと感激の声が方々で聞かれました。寒空の下で熱心にハンマーを振るった甲斐あって、アンモナイト、植物化石など、かなりの大物も含めて、参加者の大部分の方がなんらかの化石を得ることができました。なお、当日はこの工事区間の建設会社から社員の方が来てくださり、化石採取に便宜を図っていただきました。また、事前に工事現場への立入りをお願いしたところ、快く許可していただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

三本健二会員から、この化石採集会で得られた植物化石を検討された結果について、以下の報文をよせていただきました。

(吉倉紳一)

観察会で得られた植物化石

三本 健二

今回の観察会で得られた植物化石は次のようなものであった。その中に全国的にもわずかしかな産出記録（文献）のないシダ2種—ウェイチセリアとアディアントプテリス・サワムラエが含まれている。採集日が12月24日だっただけに、この上ないクリスマスプレゼントだったと、私はひとり喜んでい

る。

コケ植物門

苔（たい）類 タリテス Thallites sp.

シダ門

シダ類 ウェイチセリア Weichselia sp.

所属不明 アディアントプテリス・サワムラエ Adiantopteris sawamurae Kimura et Ohana

クラドフレビス Cladophlebis sp.

ソテツ門

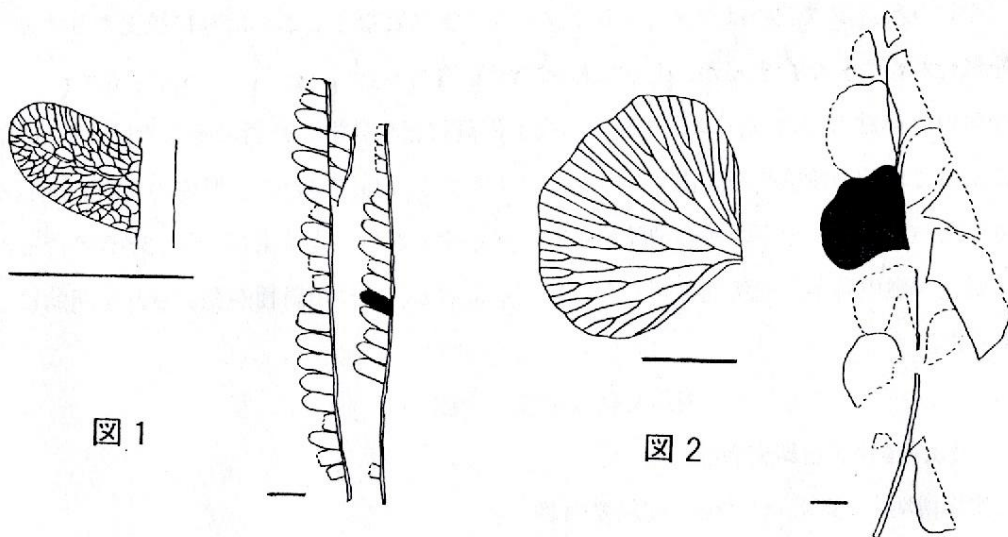
ベネチテス類 ザミテス Zamites sp.

ソテツ類 ニルソニア・カナデンシス? Nilssonia cf. canadensis Bell

マツ(球果)門

マキ類 ポドカルバス Podocarpus sp.

所属不明 キュプレシノクラドス・ミモトイ Cupressinocladus mimotoi Kimura et Ohana



ウェイチセリアは、一見そんじょそこのシダのように見えるが、たくさん出てくるクラドフレビスなどとは違って、葉脈—専門用語でいうと小羽片の側脈—が網目のようになるのが特徴である(図1)。これを日本でみつけたと報告した文献は、藤岡一男(1973)と木村達明・相場(あいば)博明(1985)の二つだけらしい。前者は土佐山田町新改(しんがい)で故平田茂留(もとめ)先生が採集されたもの、後者は関東の赤石山地で相場氏が採集されたものという。文献での記録はこれだけだとしても、日本外帯に広く産山するものと予測され、あちこちでみつかつていいる可能性がある。国外ではイギリス、フランス、ポルトガル、インド、沿海州などから報告されている。今回得られた化石は葉のごく一部だが、葉全体は長さ1mをこえる大型のものという。

アディアントプテリス・サウムラエ方は、高知化石研究会が『高知の化石』という写真集をつくったのを契機に、木村達明・大花民子(1987)が新種として発表したシダである。ただし、新種とはいっても、かつて大石三郎(1940)がアディアントプテリス・トヨラエンシスと考えた化石のうち、土佐山田町弘法谷で得られた標本を再検討したら別種だと分かったというものである。契機となった化石は、当時高知小津高校生だった沢村忠慶氏が南国市才谷口で採集していた。同氏は、その後高知大学地学

科に進み、すでに卒業されている。種名の中の「サワムラ」は、彼のことをさしている。属名のアディアントプテリスは、外観がハコネシダなどを含む現世のアディアンタム属に似ていることから名付けられたものである。このなかまは野外で見たことはなくても、花屋さんに行けば鉢植えのものをみることができる。アディアントプテリスの「小羽片」はまるでイチョウの葉のような形をしている（図2）。

その他の植物化石について紹介する。タリテスは一時期マーチャンチテス・ヤベイの名で記録されていたもので、コケのなかまと考えられている。ザミテスは英語風に読めばザマイテスで、むかしキカデオイデアとかザミオフィウムとか呼んでいた葉と同じ種類だと思われる。ニルソニア・カナデンスに比較されるものは、以前ニルソニア・オリエンタリスと呼ばれていた。ポドカルパスと書いたものは、現世のナギに近い植物と考えられる。英語風に読めばポドカーパスとなる。キュープレシノクラドスは、やはり英語風に読めばキュープレシノクレイダスとなる。これは庭に植えたりするビャクシンによく似た針葉樹のなかまだが、それとは別の科に属する。

なお、今回の産出地点の南方、つまり最初に汽水性貝化石を見学した所のそばでは、1987年からその翌年にかけて多数の植物化石が出て、マスコミでも大きく報道された。県内の化石の話題としては、大騒ぎになった方だと思う。その時採集された化石の中から、当時東京学芸大学教授だった木村達明博士（現在自然史科学研究所理事）たちの研究によって、三つの新種が発表され学問的にも重要な成果があった。

引用文献（掲載誌，巻，号）

藤岡和男，1973，植物化石研究会誌3号

木村立明・相場博明，1985，日本学士院紀要61巻〔B〕

木村立明・大花民子，1987，国立科学博物館研究報告〔C〕13巻1号

大石三郎，1940，北海道帝国大学理学部紀要〔4〕5巻